

[第14回日本言語文化研究会発表要旨]

大和定住促進センターでのコミュニケーション行動
—エスノグラフィ—的研究の試み—

谷淵麻子

(1997.6.21 発表)

0. はじめに

国際化、異文化交流といった言葉は、巷にあふれているが、実際の現状はどうであり、その現場ではどのような取り組みがなされているのであろうか。また、その中にいる人々のコミュニケーションの取り方はどういったものであるのか。インドシナ（ベトナム、ラオス、カンボジア）難民の人達が、来日後およそ6か月を過ごす定住促進センターは、彼らの母国とも日本社会とも違う独自のコミュニティである。本研究では、フィールドワークを通じてセンター内のコミュニケーションを観察し、その特徴を探っていく。

1. 背景

1975年のベトナム、ラオス、カンボジアの政変により発生したインドシナ難民に対する受け入れ、および定住促進事業を行うため、日本政府は1979年にアジア福祉教育財団に難民事業本部を設置し、同年関西地区に姫路定住促進センターを、翌年関東地区に大和定住促進センターを、1983年には東京（品川）に国際救援センターを開設した。姫路定住促進センターは、現在関西支部として定住者の生活支援を主に行っている。

現在大和定住センターに入所しているのは、既に日本に定住している人達の家族呼び寄せで来日した人達である。国連とベトナム政府の間には、ODP (Order Departure Program) (合法出国計画) が交わされており、ラオス、カンボジアの場合は一般入国としてであるが、日本政府が受け入れるという形をとっている。

センターでは、4か月集中して日本語を学び、学童期の子供達はその後、センターを出るまで、近くの南林間小学校の国際交流クラスに在籍する。

2. 調査方法

(1) 目的

難民あるいはその家族として来日した人達は、最初のおよそ半年を定住促進センターで過ごした後、日本社会（会社や学校、地域社会）へ出ていく。センターにはセンターの、それぞれの社会にはそれぞれの社会の枠組み、常識、ルール等が働いていると思われる。日本で生活していくための準備段階として過ごすセンターでのコミュニケーションを観察することによって、日本における異文化交流のひとつのケースを学んでいく。

(2) 方法&データ

・'96/11～'97/4 までの定住促進センター内の補習授業（夜間中学へ行くため）を通しての観察－テープにとり文字起こし。フィールドノート

* researcherの立場－ボランティアの教師（insider）

* 対象－'97/10にセンターに入所し、ご両親の強い希望もあって、センター修了後働きながら夜間中学へ行く予定の17歳のカンボジア青年（カンボジアで中学1年まで勉強）とセンター修了後、学校で学ぶ予定はないが、勉強したい人（ラオス人男性1人、ベトナム人男性4人女性3人、カンボジア人女性一人）平均年齢は21.4歳であった。

* 授業－11回。平均出席人数8.3人

・通常の日本語の授業観察

・インタビュー－日本語の先生。隣に住むカトリックのシスター。

大和市教育委員会の指導主事の先生。大和市国際化協会の係長。

3. 補習授業におけるコミュニケーション

－積極的発話・協力的学習・ユーモア

センターの人達の共通語は日本語であり、違う国の人同士は初級レベルの日本語で話さなければならない。英語ができる人もいるが、英語が使われているのを見たことはない。今回（99期生）は、カンボジア人女性がベトナム語が話せたため、Aさん（夜間中学へ行く予定のカンボジア人男性）との間に入ってベトナム語、カンボジア語、日本語を使って会話がなされていた。

1) 積極的発話

a : 他の人への質問に答える。

e x) T (教師) 「(ラオス人男性に) えっ、あの、誰かご家族、家族はいるんですか？」

A (カンボジア人男性) 「広島、住んでいます。」

e x) T 「(写真を見て) Fさん、どこに写ってますか？ あれ、TさんとFさんがご兄弟。」

A : 「はい。」

b : 教師の発話から自分の知っていることを言う。

e x) T 「えっとー、じゃあ、今日はえっとねー、Hさんとー。」

A : 「Hさん、うち帰りました。」

c : くりかえし

(1) 他の人の発話の中の単語を口に出して言う。(真似)

e x) T 「そうそう。そこは、横何キロですか？」

(2、3人が) 「3」「3」

A : 「3」

e x) T 「(ラオス人男性に) えー、どうしてですか？」

M (ベトナム人) : 「どうですか？」

T 「えっ、あの誰かご家族、家族はいるんですか？」

M 「家族」

(2) 分からないというシグナルとして、発話の中の単語を取り出してくりかえす。

e x) T 「あっ、Yさんのお話していたことは何ですか？」

Y (ベトナム人女性) 「表し・・・」

T 「表し形ですか？」

Y 「はい。」

(日本語のY先生へのインタビューより)

「(センターの日本語の授業は) なるべく話すように、発話を尊重してます。方針は、文型積み上げ式ですけど、教室での発話は、その課に合う合わないにかかわらず、尊重して生かしていくってことですよね。教科書に載ってないことでも、他の人に支障をきたしたりするような時は、『ちょっと待ってね』っていいですけど。」

2) 協力的学習—平均8.3 人いたが、教える中心はAになってしまう。その時でも、2～3人ずつ自然に教え合って進んでいる。皆、勉強熱心であった。

3) ユーモア

e x) I 「あの一、わたしは、い一（胃）が痛い。休みます。」

A 「うそ、うそ、うそ」

I 「失礼しました。」（出ていく。）

A 「I さん、かみます。（帰ります?）」（皆、笑う）

4. A にとってのセンターでの学びの意義と今後の勉強について

①センター修了直後（'97/4/30）に、カンボジア人通訳の方を介して

「センターの先生はカンボジアよりも優しい。」

「これから、夜間中学へ行くが、自分の日本語の能力もないし、中学はプノンペンで行ったが、小学校は地方だったし、あまり授業もなかったから、勉強していない。」

「日本とカンボジアで計算の仕方が違う。」—教師が無意識に同化を強いていた可能性があるのではないか。

②日本語の先生へのインタビュー

「A は、最初4人のクラスで、そのうち3人（男性1人、女性2人）がベトナム人だったので、萎縮していた。3人は、ベトナム人というだけでなく、日本語のレベルも既習で、Aより上だった。でも、ある時期彼は飛躍的に伸びた。プレッシャーを乗り越えたのは、ひとつには性格的なもの（明るくて、冗談好きで愛嬌がある）、それから担当の先生方（4人）が気を使って、教室内でベトナム語をなるべく使わせないようにしたり、皆のクラスという意識を持たせようとしたのが良かったのではないか。先生方は、親しみやすさ、和やかな授業を心掛けている。伸びたのは、多分、漢字を導入した1か月目の終り位から。文字が好きだったらしいし、テストも良かったし、先生もそれを特にほめるようにした。彼のこれからについては、分からない。いろいろなケースがあるから、経験から一般化できない。（インタビュアーの言った）センターを出たこれからについての緊張は確かにあるだろう。」

5. 私達（彼らを取り巻く日本人）の関わり方の問題

シスターへのインタビューより

「本当に彼らが何をしてほしいかに目を向けることが大切。一人一人を本当に愛しているか。何人、何人というのではなくて、彼らの側に立つことです。また、関わってほしくない部分があることも忘れてはなりません。」

「『日本人みたいね。』と言われることは、彼らは喜びません。ベトナム人としての誇りがあって、そういうことを言う『私はベトナム人です。』といつも言われます。」

「（センターを出てからの）アフターケアがしっかりしていません。ポーンと日本社会にほうり出されてしまいます。」

*センターでのアフターケア—職業相談員3人（仕事関係）

難民相談員5人（生活一般、冠婚葬祭関係など）

6. まとめと今後の課題

第二言語として日本語を学ぶ、あるいは日本語で学ぶ人達の教室でのコミュニケーションに興味をもち、短い期間ではあるが関わらせて頂き、授業に参加する一人一人の相互交流と創意工夫により独自の場がつけられていることを知ることができた。この機会を与えて下さったセンターの方々には心から感謝したい。コミュニケーションは各場面において異なるものであり、日本に暮らす外国人の人達が増えている現在、その人達の使う日本語でのコミュニケーション全てが生のものであり、それらは絶えず生成し変化し続けるものであるかもしれない。また第二言語で学ぶ教室は、言葉を覚えると同時にその言葉を使い合い、その言葉を使って新しいことを学習していく場である。そういった教室についてより深く理解していくために、今後はinteractionについてより詳細に分析し、またセンター修了後の学校社会について研究していくことができたかと考えている。

<主な参考文献>

Dinna, M. J. (1992) "Ethnographic Research." *Approaches to Research in Second Language Learning*. pp132-163. Longman

George & Louise, S. (ed.) (1987) *Interpretive Ethnography of Education At Home and Abroad*. Lawrence Erlbaum ASSOCIATES, Publishers

（お茶の水女子大学人文科学研究科日本語文化専攻2年）